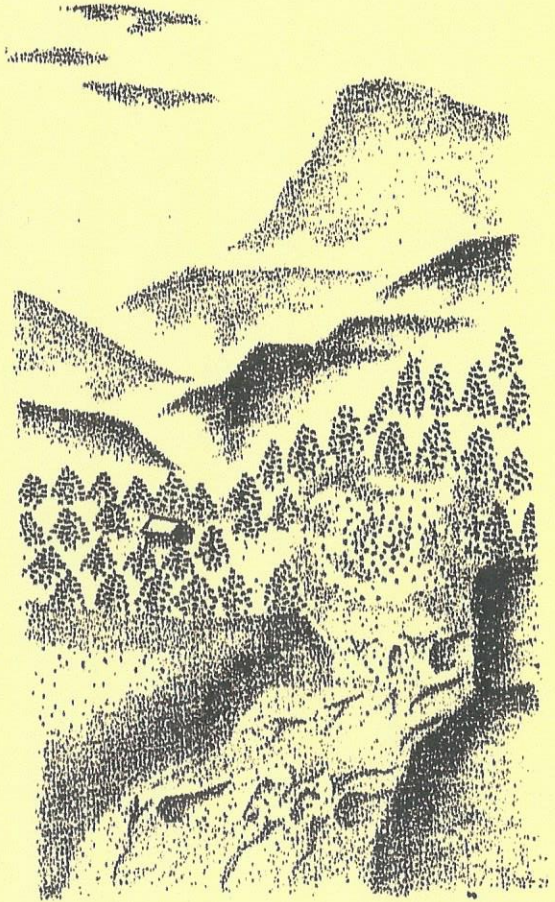


湧水 第十三号 令和四年七月 発行

# 湧水



千代田岳精会 自作自詠俳句研修会

## 湧水第十三号目次 (五十音順)

作者俳号	名	頁	作者俳号	名	頁
伊藤しろう	(彰一)	1	橋本千舟	(隆一)	8
鶉飼てるお	(輝夫)	2	八田玄猷	(豊)	9
神田つねこ	(恒子)	3	藤原壽	(壽子)	10
近藤まき	(まき子)	4	細川をさむ	(修)	11
座間萌泉	(文子)	5	前田道人	(道紀)	12
鈴木陵人	(重成)	6			
徳本じゅんじ	(順治)	7	磯田烏城(貞二)	様を悼む	14・13

「土筆」

伊藤しよう（彰一）

袴付け直立不動土筆かな  
木漏れ日の時にまぶしき薄暑かな  
雨上り紫陽花の花頭垂れ  
コンサート今宵主役は鉦叩  
名月や南の空をあかあかと  
新米や光放ちて炊き上がり  
雪吊や傘の形して庭の木々  
寒菊や山影遠く日の暮るる

1

「蝉の声」

鶉飼てるお（輝夫）

陽の届く池底や寒鯉の影  
早梅の白き一輪りりしきや  
見る人もなくただよへり花いかだ  
まなかひに黒富士そびゆ梅雨晴間  
窓をあけ背伸びして聞く蝉の声  
闇とおし赤子の泣く声薄暑かな  
あかまんまこさめのなかにすがれをり  
寒菊や野の一輪に日の射して

2

「青蜜柑」

神田つねこ（恒子）

指に棘刺さる痛さや冴え返る  
あつあつの衣被を撮み食ひす  
つくしんぼ飽くほど眺め夫描く  
雨の日や花穂のゆるる赤まんま  
大雨の予報が外れ青蜜柑  
今年米届き電話で語る無事  
雪吊を終へて庭師のしたり顔  
冬菊を父の墓前に供華とする

3

「名月」

近藤まき（まき子）

寒鯉や尾びれ一振り水ゆらぐ  
弓道場弦音ひびきて冴返る  
春惜しむ一駅ごとに目の醒めて  
瀬の音に和して河鹿の声の湧く  
母を追ふ子が振りまはす猫じゃらし  
名月や即興芝居に駆り出され  
雪吊や頭飾で化粧する  
逝く父に庭の寒菊別れ花

4

「赤まんま」

座間萌泉（文子）

リハビリの試歩に寄り添ひ春惜しむ  
水飲み場光るしぶきの薄暑かな  
読経の木魚に和して蟬の声  
上水の流れに沿うて赤まんま  
枝先に爆ぜし柘榴や実の露わ  
新米や目盛り確かむ水加減  
塀越しの雪吊並び武家屋敷  
寒菊のかをり束ねし麻の紐

5

「幸を待つ」

鈴木陵人（重成）

春待つや老ひの二文字脇へ遣り  
遠霞おビルの林や鳥の群  
新緑や背伸びの二人高き空  
城濠の緑や梅雨の雲低し  
児を胸に母颯爽と日傘かな  
新涼や僧の読経に濁りなし  
一本と雖も芒風さやぐ  
山茶花やふと口をつき童唄

6



「家路」

徳本じゆんじ（順治）

川面の薄墨色や冬の鯉

妻の待つ帰宅の路地の冴え返る

テイルルーム窓辺の妻と春惜しむ

詩吟の会終へて家路の薄暑かな

蛍飛び賑ふ沢のすでになし

七夕や願ひにかける孫の顔

新米の炊ける匂ひや故郷の味

一輪の冬菊庭に母偲ぶ

「米寿」

橋本千舟（隆一）

生かされて生きて米寿や去年今年

島山に潮騒を聞き春惜しむ

四十雀来鳴く湿原明け初むる

走り根につまづく老や青葉闇

諳ずる李白の絶句虫の夜

雲の裏名月遊行明りかな

雪吊の風に鳴る縄揺るぎなし

母の忌や仏前に寒菊の供華

「河鹿の音」

八田玄猷（豊）

梅咲くや詩を吟じつつ友俣ぶ  
まぼろしの桜前線家ごもり  
せせらぎの河鹿の音愛づる峽日和  
夏空や五輪とコロナ相容れず  
しばらくは自肅の恩恵秋深し  
売家札下がる軒端や柚二つ  
流るるや流星群の夜もすがら  
世界より疫病去れよと除夜の鐘

「待つよるこび」

藤原壽（壽子）

初鏡目もとの黒子愛しかり  
初春や職員募集継続中  
静かさよ待つよるこびの初明り  
父まはす郷土の独楽のうなり音  
長針の動く一瞬椿落つ  
鬼やらひ自肅の鬼の泣き笑ひ  
詩心の劣化の日々や土筆生ふ  
悠悠と己貫くおらが春

「去年今年」

細川をさむ（修）

去年今年持病を友に暮らしをり  
偕老のカット大事や桃の里  
庭先に肌着干したり梅雨晴間  
浅草寺詣でを終へてどぜう鍋  
子の誕生日祝ふ一家や赤まんま  
西瓜切り笑みし遺影と語り合ひ  
玄関をいで満月に出会ふかな  
寒菊の小花きいろや朝日差し

「白紙に墨を置く」

前田道人（道紀）

埋火やふたりの黙にいろを足す  
刻まれし皺こそが母初鏡  
ドクターストップ言い訳なしの冬籠り  
薄明り曲り屋の土間春兆す  
梅雨入りかや逃げこむ猫と軒を借る  
徘徊と言わせぬ湖の星月夜  
鮎料理死ぬほど好きで死なぬ妻  
平安を識る中辺路に冬小菊

「千代田吟道大学」を提唱された磯田先生のご指導をいただき「自作自詠研修会」が発足したと記憶しているが、先生の影ながらのお力添えは絶大だったと思う。先生がいつ、どこで詠まれるのか、さりげなく名句を寄せられていたのには敬服していた。本来の吟道でのお導きと併せて、趣味の広がりを見せていたものだ。

静かな笑顔は忘れられない。

先生 本当ありがとうございます。

合掌

あの笑顔遥か偲ぶや月冴ゆる 鈴木陵人

追悼の句

（五十音順）

凛として腹からの吟声冴ゆる	伊藤しよう
山眠る磯田先生さようなら	鶉飼てるお
忘れぬ先生の吟寒椿	神田つねこ
詠ずれば千代田の空に声冴ゆる	近藤まき
吟じつつ枯野に消ゆる影ひとつ	座間萌泉
冬帽の似合ふ先生旅立てり	橋本千舟
師の元へ届け吟声冬三日月	藤原壽
寒椿投句せらるる師の笑顔	細川をさむ
寒晒自作自詠に師の氣迫	前田道人

ご冥福をお祈りいたします

（令和三年十二月二十七日逝去 享年九十三歳）



自作自詠俳句研修会 実施事項

※ 例会 毎月第二火曜日 午後一時より（原則として）

① 名句鑑賞・解説（当番制）

② 自作自詠

・ 自作俳句二句の紹介と一句自詠（独吟）

・ 俳友の感想、先生の句評

③ 自選一句（新聞俳壇等）、紹介と選者範吟・合吟

④ 翌月の兼題の選定

※ 行事 吟行会（原則年二回）、懇親会、その他

※ 句誌「湧水」年一回発行

千代田岳精会自作自詠俳句研修会 役員

参与

運営委員

顧問 前田道人

鈴木陵人 リーダー 橋本千舟

岩崎泰俊 サブリーダー 細川をさむ

徳本じゅんじ 運営担当 神田つねこ、座間萌泉、伊藤しょう

伴奏担当 藤原壽、神田つねこ、座間萌泉

企画担当 鶴飼てるお、伊藤しょう

編集担当 細川をさむ、近藤まさ

神田つねこ、座間萌泉